福島とともに

神田外語大学

キャリア教育センター長
柴田真一教授ゼミ

井口紗菜
及川優希
大山豪太
岡崎心春
緒方一華
長田紬
坂本優汰
捧一真
佐藤唯
関口舜矢
関口椋久
セネビラッナ カルパナ
萩原海李
東雪乃
ペリッジ京メアリー
宮﨑結子
山下亜由美
山本悠加
米山佳奏

特別協力：福島民報社

東日本大震災から15年

未来創る英知と覚悟

東日本大震災からもうすぐ15年。地震、津波、そして東京電力福島第1原発事故の影響を大きく受けた福島県の双葉地方は、復興に向けて着実に歩み出していた。二酸化炭素を発生させない水素生産やロボット研究の施設が稼働し、新産業の研究開発や人材育成を担う福島国際研究教育機構（F―REI、エフレイ）の整備も進む。農業分野ではサツマイモやバナナなど新たな特産品が生まれた。私たち神田外語大（千葉市）の柴田真一教授ゼミの3年生19人は新たな一歩を踏み出した双葉地方を取材し、未来を創る英知の結集と地域に生きる人たちの覚悟を目の当たりにした。国内外に向けて「福島の今」を伝えたい。

神田外語大生が取材

エフレイ 世界の「最先端」集約

浪江町にあるエフレイは震災と原発事故からの復興を目指し、単なる福島の再生ではなく、新しい価値を創出する研究拠点だ。本部、研究実験施設、短期宿泊施設などの建設が進む。本部は2028（令和10）年度、それ以外は2030年度の完成予定だ。エフレイは2025年4月、福島・国際研究産業都市（イノベーション・コースト）構想の研究開発拠点として福島県が南相馬市に整備した「福島ロボットテストフィールド（ロボテス）」を統合した。現在、エフレイのロボットやドローンの実証研究拠点として活用されている。

浪江町は水素と再生可能エネルギーを生かした新たなまちづくりを進めている。町内には脱炭素社会に向けたエネルギーとして注目される水素製造の研究拠点「福島水素エネルギー研究フィールド（FH2R）」がある。約22ヘクタールの敷地には、研究プラントを囲むように約6万8000枚の太陽光パネルが設置されている。10メガワットの水素製造装置で水の電気分解を行い、水素を製造し、貯蔵、供給している。毎時1200ノルマル立方メートルの水素を生み出す。燃料電池車約560台分に相当する世界有数の規模だ。ここで作られた水素は2021年の東京五輪の聖火台や聖火リレー用トーチにも使用された。ただ、水素は製造や輸送のコストが高く、運用の制度整備が進んでいないことなど課題も多いという。

双葉郡内には他にも研究施設や企業の進出が相次いでいる。エフレイを中心にして、さまざまな分野から世界最先端の研究組織、技術、人が集まっているという。エフレイは復興への「希望の光」だ。

残る課題 社会全体で考えて

原発事故があった福島県は特有の課題が山積している。社会全体が自分ごととして考え、向き合い続けなければならない。

大量の除染廃棄物はフレコンバッグと呼ばれる黒い大型の袋に詰められ、大熊町と双葉町にまたがる中間貯蔵施設へ運び込まれている。2045年3月までに福島県外で最終処分する計画だが、処分先はいまだに決まっていない。

国は最終処分量を減らすため一定の基準を満たした除去土を公共事業の資材として再利用する方針だ。首相官邸の敷地で一部が使われ、「前向きな一歩」として報じられた。事故の風化を防ぐ意味では社会に希望を感じさせる出来事だったといえる。ただ、実際に再利用されたのは、ほんのわずかな量だった。

首相官邸での活用は象徴的な一歩にすぎない。真の課題は土を運ぶことではなく、福島県内の立ち入り禁止区域をなくし、住民が安心して暮らせる環境を取り戻すことにある。

特産育て心の復興

広野 大熊 バナナ、イチゴ栽培に希望

被災地の復興には特産品が欠かせない。新たな農業や漁業の形を探り、「心の復興」を目指している。

広野町振興公社は「トロピカルフルーツミュージアム」のハウスでバナナなどを栽培し、住民が古里に「誇り」と「希望」を取り戻す後押しをしている。

社長の中津弘文さん(68)は「地域と連携した魅力づくりが重要」と強調する。震災後の暗いイメージを払拭するには新しい多様な産業を地域ぐるみで育てていく必要がある。象徴的な取り組みがバナナ栽培だ。この挑戦は震災後の数々の苦難に立ち向かう町民の姿と重なり、住民に勇気を与えている。

バナナは、「朝陽に輝く水平線がとても綺麗なみかんの丘のある町のバナナ」、愛称「綺麗」と名付けられた。町の魅力発信と復興への誓いが込められている。

大熊町が出資する「ネクサスファームおおくま」は地域活性化を目指して2019年にイチゴ栽培を始めた。4・8ヘクタールの敷地に2・8ヘクタールのハウスがある。福島の復興と地域の持続可能な発展を支える新しい農業の形として挑戦を続けている。

栽培データで糖度や品質を可視化している。従業員はハウス内の生育管理や収穫補助、データ入力などを機械やコンピューターと分業しながら作業に取り組んでいる。工場長の徳田辰吾さん(46)は、誰でもイチゴ作りができるようにして「10年、20年後、『大熊町はイチゴの町になったね』という声が聞こえてくるようになれば面白い」と話している。

バナナ栽培を心の復興につなげるトロピカルフルーツミュージアム

「バナナ」をビールに

柴田ゼミのメンバーは福島の特産品を生かした地ビール造りを行う。取材したバナナやイチゴ、魚介類の中から広野町のバナナをフレーバーにすることを決めた。

伝承館語り部 無関心やめよう

双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館で「語り部」を務める元高校養護教諭の女性から当時の体験や思いを聞いた。「原発事故が学校にもたらしたもの」がテーマで、偏見やいじめが存在したという話に心が痛んだ。

女性は避難先で体育館を借りて学校生活を続け、生徒のケアにあたった。環境の変化で精神的、身体的に不調を訴える生徒が増えた。大きな問題となったのがいじめだ。放射線への不安から、被災地の生徒が県内外で差別されたという。空間や食材の線量測定、甲状腺検査によって安全は確認されていたにもかかわらず、誹謗中傷は消えなかった。生徒に寄り添った先生の生の声に触れ、展示物だけでは分からない当時の混乱した様子が想像できた。

今は、新たに「関心の低さ」が課題だ。女性は「私たちの経験が生かされていないと感じる」と語った。日本は地震大国であり、どこでも同じような事故が起こり得るとし、「正しい知識を学び、無関心をやめることが大切だ」と訴えた。関心のない人や子供たちに、あの災害をどう伝えればいいのか考え続けたい。

浪江の柴栄水産 海と人つなぐ

「全国に浪江の魚の良さを伝えたい」。浪江町請戸の水産加工業「柴栄水産」の3代目社長柴強さん(59)の信念だ。震災と原発事故で工場は壊滅的な被害を受け、魚の水揚げは止まった。地元への思いを胸に9年後、事業を再開した。海と人とを再びつなぐ営みは、地域の誇りであり、福島の復興の象徴でもある。

先の見えない不安な日々の中で、地元住民の励ましや自治体から事業の再開要請が続いた。町内の商業施設が開業前に実施した「販売してほしい商品」アンケートでは「請戸の魚」という回答が多く、地域住民の熱意に触れた。

新工場は2020年2月に完成し、同年4月に請戸漁港で初競りが行われると同時に事業を再開した。今は地元の飲食店に加え県外市場にも出荷している。

柴さんは「復興とは失われたものを取り戻すだけでなく、新しい価値を生み出すことだ」と強調する。活気があったかつての姿を取り戻すだけでなく、挑戦を続けることで請戸のにぎわいを取り戻す覚悟だ。

浪江の鮮魚堪能「請戸盛」どうぞ

大熊町の商業施設クマSUNテラスの飲食店「葦駄天IDATENおおくま店」で昼食に刺身定食「請戸盛」(税込み1500円)を食べた＝写真＝。柴栄水産から仕入れたマダイ、サワラ、ヒラメを新鮮な状態で食べることができた。地元住民に長く支持されている理由がよく分かるおいしさだった。

希望のとびら

▽双葉駅に隣接するJR双葉町のコミュニティセンターに鮮やかなピンク色の大きなドアがある。その名も「希望のとびら」。2022(令和4)年8月、町の特定復興再生拠点区域の避難指示解除に合わせて設置されたモニュメントだ＝写真＝。

▽実際に扉をくぐってみた。漫画ドラえもんの「どこでもドア」を連想し、扉の先に本当に新しい何かが始まるような気持ちが湧き上がった。

▽震災からまもなく15年。復興を遂げるには多くの課題が山積していることを実感した。帰還したいが戻れない町民もいるというが、古里への思いはさまざまだ。一方で双葉町を知らない多くの人がこの地を訪ね、この扉を開けて「福島の今」を知ることが大切なのだと思う。

福島しろはとファーム 瀧澤芽衣さん

農業通し楢葉に笑顔

楢葉町に農業を通じて地域の未来を切り開こうとする女性がいる。サツマイモ生産を手がける「福島しろはとファーム」の瀧澤芽衣さん(33)だ。結婚・子育てをしながら農業に取り組む姿は、触れ合う人々の心を温かくし、自然と笑顔の輪が広がる。「楢葉の太陽」と呼びたくなる存在だ。

瀧澤さんは神奈川県相模原市出身。明治大農学部で学んだ際、日本の食料自給率の低下など農業が抱える危機に直面し、六次化で「日本の農業を変えたい」と考えるようになった。白ハトグループに入社し、農業経営や地域との関わりを学んだ。2020(令和2)年、楢葉町へ移住し、新たな挑戦を始めた。

福島しろはとファームは白ハトグループのサツマイモ原料の育苗から収穫・管理までを担う農業法人。収穫後はグループ会社で加工・販売される。看板商品である大学芋は台湾やタイでも人気が見込まれ、海外展開が大きく伸びる可能性を秘めている。

瀧澤さんは「お芋を地域を元気にする力、地域に笑顔を増やす力にしたい」と熱く語る。元々楢葉に住んでいた人に加え、震災後に移り住んだ人や新たに農業に取り組む若者がともに畑で汗を流し、新しい農業の形が芽生えている。学校と連携した子どもたちの体験学習も採り入れ、次世代へ農業の魅力を伝えている。

子育てと農業の両立には課題もある。近くに病院が少なく、出産は里帰りを選択せざるを得なかった。「子どもが熱を出した時など、親として不安を感じることもある」と率直に話す。「もっと住みよい楢葉に」と農業だけでなく生活面の課題にも目を向けている。

農業と子育ての実践を重ねる瀧澤さん。挑戦は、地域に笑顔を広げながらこれからも続いていく。

浅野撚糸 子安結愛華さん

故郷離れ双葉で挑戦

「京都には日本の昔がある東京には日本の今がある双葉には日本の未来がある」。復興への強い思いを持って双葉町に事業所を構えた浅野撚糸（本社・岐阜県安八町）の浅野雅己社長の言葉を胸にしっかりと刻んだ。岐阜県出身の子安結愛華さん(22)は社長の思いを体現するべく同社の双葉事業所で働く。

3年前、入社試験の面接で双葉での勤務を打診された。縁もゆかりもない町。当初は戸惑いもあったが、「故郷を離れて働く挑戦をしてみたい」と決意した。

「震災から10年以上が経過し、復興は進んでいると思っていた」。しかし実際に訪れた町の様子にがくぜんとした。特定復興再生拠点区域に限って避難指示が解除されたばかりの町内は震災当時のまま残る建物も多かった。「当初思い描いた復興のイメージとは大きく違った」と振り返る。

双葉で働き、2年半が経過した。当初は1年で本社に戻る約束だったが、「復興の歩みを自分の目で見届けたい」と社長に伝え、現在も任期を延長して働いている。ようやく生活のインフラが整い始めた場所に、若い世代が住み、社会の現場に立ち続ける姿は、地域にとって大きな希望だ。

「双葉に来てからさまざまなことに挑戦でき、ここで働くことは楽しい」と語る子安さん。浅野撚糸は高機能タオル「エアーかおる」を開発し全国に知られる存在だ。双葉事業所はカフェを併設し、地域住民や来訪者が集う交流拠点としての役割を担っている。

住環境、雇用の場 整備を

復興への課題も多い。原発事故で避難を余儀なくされた12の市町村では移住希望者が増えている。地域復興の推進力にしたいが、企業が立地し働く場所はあるものの住まいが少ない。

ふくしま12市町村移住支援センターの藤川城一さん(54)は「震災後に取り壊されている空き家が多く、移住の促進には住宅環境の整備が急務」と指摘する。

起業を支援する大熊インキュベーションセンターは高校生向けのインターンを実施し、教育を通じて挑戦の場を広げている。センターのコミュニティマネージャーで、自らも入居企業の現地スタッフである谷田川佐和さん(28)は「若者が挑戦できる場をどう確保するかが大切」と語り、一定の復興が進んだ先を見据えた思いをにじませる。

「福島の声」国内外に発信

編集後記

取材を通し印象的だったのは、それぞれの立場で復興に向き合い、困難に屈せず未来を見据えて挑戦を続けている姿です。その強さに触れ、私たちは「伝えることの責任」を改めて考えさせられました。

神田外語大に通う私たちは言語を学び、異文化への理解を深めています。学びの根底には「世界に伝える力を持つこと」「異なる文化をつなぐこと」があります。海外では福島に対する根拠のない風評がいまだに拭い去れていません。自分たちの学びを生かし、現地で得た「生の声」を国内外に発信します。国際社会で福島への理解、信頼を築くためにわれわれにできる大切な役割です。

エフレイが進める第1期中期計画では、500人規模の研究者集団を形成し、30%を海外研究者とする目標を掲げています。国際的な研究拠点構築への挑戦は、私たちの学びと合致します。神田外語大で培った視点が、世界の人々を結ぶ一助になると信じています。

新聞の題字を「福島とともに」としたのは福島を単に「取材対象」として描くのではなく、私たち自身が未来をともに歩む決意を示すためです。復興は福島だけの問題ではなく、日本全体、さらには世界で共有されるべき課題です。福島と「ともに」歩む姿勢を忘れず、言語を学ぶ私たちだからこそできる役割を果たしていきます。新聞を手に取る方々にも未来をともに考えていただければ幸いです。

（関口 椋久）

神田外語グループ建学の理念 言葉は世界をつなぐ平和の礎

取材させていただいた施設、企業のみなさま。大変お世話になりました。

1日目
- 東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉町）
- 双葉産業交流センター（双葉町）
- 震災遺構・請戸小学校（浪江町）
- JR双葉駅前（双葉町）
- 中間貯蔵事業情報センター（CREVAおおくま）（大熊町）
- Jヴィレッジ（楢葉町・広野町）

2日目

●A班
- 福島水素エネルギー研究フィールド（浪江町）
- 福島ロボットテストフィールド（南相馬市）
- 道の駅なみえ（浪江町）
- 會澤高圧コンクリート福島RDMセンター（浪江町）
- 福島国際研究教育機構（F―REI）（浪江町）

●B班
- トロピカルフルーツミュージアム（広野町）
- ネクサスファームおおくま（大熊町）
- 商業施設クマSUNテラス（大熊町）
- 柴栄水産（浪江町）

●C班
- ふくしま12市町村移住支援センター（富岡町）
- 福島しろはとファーム（楢葉町）
- 商業施設クマSUNテラス（大熊町）
- 大熊インキュベーションセンター（大熊町）
- 浅野撚糸双葉事業所（双葉町）